

2020 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 14:50～15:50 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。

THE HISTORY OF THE

1789

1790

1791

1792

1793

1794

1795

1796

1797

1798

1799

1800

1801

1802

1803

1804

1805

1806

1807

1808

1809

1810

1811

1812

1813

1814

1815

1816

1817

一次の文章は二〇〇三年（平成十五年）に書かれたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（50点）

日本語の歴史のリンカクを振り返り、「国語」教育が均質な日本語を生み出す上でどのような役割を果たしてきたのか、明治以降追及されてきた均質な日本語が戦後の「国語」教育という枠の中でどのように扱われてきたのかを見てきた。それらを踏まえて、日本語の現状にもう一度焦点を絞って考え、将来の日本語を展望しよう。もともと、ここで未来の予測をするつもりはない。予測はたいてい外れているし、それに言語は人間の手が加わるものであり、どのように手が加わることになるかは、それこそ予測の範囲を越えている。重要なことは、予測をすることではなく、日本語の現状を少しでも精度をあげてとらえるということだろう。

書きことばの面では、戦後改革の中で採られた新字・新かなの政策は、成功を取めたと言ってよいだろう。その政策を成功に導いたのは、新聞社や出版社の全面的な支持と、普通教育への人びとの熱意だった。話しことばに関しては、ラジオ・テレビといった放送メディアと、教育の力によって、共通語が全国あまねく普及するという結果をもたらした。

こうして、書きことばでも話しことばでも、均質度の高い日本語が形成された。日本列島の(2)で通じる日本語を作り出そうとした明治の目標は、ほぼ達成されたと言えるだろう。日本が近代国民国家として出発した明治以降、追い求めていたものが、ようやく手に入った。それには、太平洋戦争の敗北が強く関与している。敗戦の結果、日本は占領され、アメリカ合衆国の強制力の下で押し進められた戦後改革が行われた。日本語の均質化は、戦後改革の一環である「国語改革」によって大きく進んだ。日本のウルトラ・ナシヨナリズムは、敗戦によって減んだが、日本語のナシヨナリズムは戦後になって均質化が進んだことによって、むしろその基盤を固めたのではないかと私は思う。

ところが、こうして形成された均質な日本語は、再び多様性をもち始めている。均質度の極めて高かった日本語は、内部崩壊を始めたように見える。ここ数年続いている日本語ブームは、その崩壊に対する危機意識のあらわれでもある。言語だけでなく、他の社会的な制度に関して、家庭や学校が、若者たちをこれまで通りの規範へと向かわせることはできそうにない。日本国家に

も規範を強制する力はほとんどない。だからこそ、強い国家を求める、いらだちとも見える動きが起こっているとも言えるだろう。新しいナシヨナリズムの動きは、国歌への忠誠心を入びとが失っているからこそ台頭し始めているのだ。求心力を失った日本国家に再び、磁力を与えようというのが、国家や国旗を強引に法制化した国会議員の心情であろう。少なからぬ反対の声が上がっていたにもかかわらず、十分な議論を尽くさず、法制化を急いだ背景には、国家への求心力が衰えていることに対する不安が透けて見える。そして、軍隊をもった「まっとうな国家」を目指すという勇ましい動きも、この同じ圏内にある。求心力を失った国家を再びよみがえ蘇らせることが本当に必要なことなのかどうかは、問われるべき問題であり、それはそれとして、とにかく「国語」が内部からガカイ(3)を始めていることは、事実と考えてよいだろう。

他方、日本国内には、二〇〇〇年末の時点で約一七〇万人が外国人登録をしており、一九六九年以降三二年間連続して過去最高記録を更新しているという。このような正規の手続きで滞在する外国人以外に、約二万人ものオーバーステイの外国人と、同じく二七万人の日本国籍をもちながら日本語を母語としていない人びとが、「外国人労働者」として滞在している。当然、滞在目的も資格も日本語運用能力も異なり、一様ではない。この人たちにとっては、日本語は外国語であり、日本語を母語とする人びとのかつて共有していた言語規範を彼らに強制することができるはずもない。

つまり「日本人」がこれまで使っていたのとは異なった日本語を、外国人が使用することによって、日本語は母語話者の特権的なものでなくなる可能性が浮かび上がってきたのである。「(4)」の砦とりでを守ろうとしている日本語のネイティブたちは、もはやかつてのような均質な「(5)」ではなく、多様性を含む「(6)」として、その母語を捉え直さざるをえない状況に立ち至っている。つまり、日本語は外部からもガカイを促されているのである。

しかし、これは従来の日本語（国語）をガカイさせるものであると同時に、新しい日本語を生成させるものでもある。特に「日本文化」に関心があるわけもなく、単に母国より高収入が期待できるという経済的な理由で日本にやって来た外国人たちも、日本に滞在する期間が長くなれば、当然日本語を使わざるをえなくなるだろう。居酒屋やファースト・フード店、あるいは工事現場で働くためには、片言以上の日本語が必要になるだろう。しかし、彼らが、日本語を乱しているとは通常考えない。それは、

しよせん彼らは「本物の日本語」を使えるはずがないと考えているからだ。彼らの使っている日本語が本物でない以上、そこに乱れを指摘する必要はないのだ。

言語学では、外国人用にゆっくり話したり、易しい語彙や構文を使うことを「フォーリナー・トーク」と言うが、流暢りゅうたうに日本語を話すようになった人びとに対してまでも、そういう接し方をする人がかなり多いということも、彼らの日本語を本物と考えていないということのあらわれでもある。もし、彼らを日本語の担い手として認識するならば、彼らの使う言葉に対して、より批判ないし非難がなされてもおかしくはない。批判しないということは優しさのあらわれでもあるが、外国人を日本語の正統な話し手として認めていないということでもある。日本語のあまりできない「外国人」にそのような話し方をする人たちは、その行為によって、日本語は自分たちだけのものだという壁を作りあげていることに気づいていない。

実は、日本語が一種の特権的なものであり、自分たち以外の人間には身につけられないものだという意識がその奥には潜んでいる。これは、「日本文化」なる虚構と同様、「日本語」も一種の虚構であるということと関係がある。「日本人」以外には理解できない「日本文化」があるのだという思いこみと「日本人」しか本当の日本語は使えないという思いこみは、同根と言ってよいだろう。外国人向けに特別の日本語を使うのは、もちろん相手を思いやってそうしている場合が多いと思うが（そしてそのことは悪いことではない）、背景には日本語に対する思いこみがある。その思いこみは「国語」と「日本語」ということばの使い分けの中に明確にあらわれている。

「日本語」ということばで表現すると、あたかもそれが「一つのもの」であるかのような錯覚を起すことになる。これは、他の「言語」、例えば「フランス語」「中国語」「ヒンディー語」でも同様だ。現実には存在するのは、年齢・性・社会階層・地域などによって異なる多様な種類の「ことば」であって、「○○語」というのは、一種の虚構でしかない。

日本の内外で日本語を「外国語」として学んできた人は相当数にのぼっている。国際交流基金の関連団体である日本語国際センターによれば、一九九八年における海外の日本語学習者は、一一五か国（地域）、約二一〇万二千人にのぼるといふ。海外の日本語の学習者の数は一九七九年には一二万七千人だったから、二〇年間で一六・五倍に増えた計算になる。すでに学んだ人び

とのルイセキを考えると、さらに多くの人びとが日本語を学習していることになる。⁽⁷⁾

現在日本語を外国語として学ぶ人たちの多くは、これまで日本の文化に興味を抱いて、日本語を学んできた、いわゆる知日派の外国人とはちがう。「わび」だ「さび」だといったような、あるいは浮世絵だとか生け花などといった「ジャパネスク」に興味を持つ人びとは、関心の持ち方がまったく異なっている。もちろん、旧来の知日派の人びとも、文化政策という観点からは、大切にしなければならないが、日本語の変化を促進するかどうか、という点で見ると、影響力はそれほど大きくないと言えよう。日本人よりもある意味では日本語に対してむしろ保守的な姿勢すら示す、これらの人びとは、日本語を変える中心にはなりえない。彼らは日本語をむしろ昔のままの状態（もちろんそれは一種の虚構だが）に保ちたいと考えているからだ。

日本語をこれまでの「国語」の狭い枠内にとどめておくことは、もはや許されることではない。日本語は第一言語（母語）としての使用者と、第二、第三言語としての使用者にとって使いやすいものに変わらねばならない。「国語」教育がこれまで行ってきた内容は、再検討されてしかるべきだろう。（外国人のための）日本語教育と、（日本人のための）国語教育というものは、同一のものであるはずはないが、両者がまったく没交渉であるという現状は、改革されねばならない。

そのためには、日本語をもっと開いたものとする必要がある。⁽⁸⁾加藤秀俊は、日本語の「開国」のためには次の四つの「自由」が必要だと述べている。

- ① 完全主義からの自由
- ② 文学からの自由・あるいは美学からの自由
- ③ 漢字からの自由
- ④ 文字からの自由

これだけでは、ちょっと分かりにくいので、説明と私の考えを示しておこう。まず、①は母語としている人間とまったく同じ

ように第二言語をアヤツることは不可能だし、それを望むべきではないということだ。外国人が多少おかしな日本語を話したとしても、それを許容する、あるいはその意をくむように努力する必要があるということだ。これを応用すると、「これまでのような」日本語のできない「日本人」の場合に関しても、そのような「(新しい)日本語」を積極的に認知していこうということになる。

次に、②は日常生活の言語は、芸術の言語を中心にして考えられるべきではないということだ。言語芸術としての文学というのは、確かに大切なものではあるが、しかし、現在まであまりにも文学の言語にとらわれすぎていたのではないかというのが、加藤の考えだ。文学者の中には自分たちこそが日本語のプロであり、最もすぐれた日本語の使い手であると考えている人がいるようだ。しかし、日常の言語が文字の言語に従属すべきだということにはなるまい。

③については、加藤によれば、どの言葉を漢字にし、どの言葉をひらがなにするのかという原則はない。そして、おびただしい数の漢字は、外国人が日本語を学習する意欲をそいでいるということになる。

④については、若干異論がある。加藤は次のように述べている。

これまで一世紀のあいだ、日本は初等教育に力を入れ、その結果としてこれだけ複雑な文字体系をもった『日本語』を国民すべての基礎教養とすることに成功した。それは世界に誇るべき文化的大事業であったといってさしつかえない。しかし、その結果、われわれのあいだには『文字』にたいする不当、かつ過大な評価がうまれてしまっているようにおもえる。つまり、『文字』がわからなければ『言語』がわからない、という錯覚がわれわれを支配してしまっているのである。(中略) こうした『文字中心主義』とでもいうべき言語哲学が、われわれの心のなかにおおかれすくなければこつている。だが、それはあきらかにまちがいだ。

この前半の部分の認識に関しては、おそらく事実といってよいだろう。しかし、後半の「文字中心主義」に関しては、疑問が

ある。日本語に限らず、文字が言語の本質ではないという議論については、近代言語学の「常識」を踏まえたものだと考えられる。文字が分からなければ言語が分からないとは、私も考えてはいないが、しかし、文字も含めて言語をトータルに考えるべきではないだろうか。

⁽¹⁰⁾ 言語と文字の結びつきについては、文字に対する愛着は決して小さな問題ではなく、その使用者にとつては、大きな意味をもつと考えるべきだ。しかも、その文字の使用率が高い場合、別の文字に取り替えるということは、言語に大きな変更を加えられたという意識を持つことになるだろう。そして、かなりの言語が死を迎えるかもしれないという、これから先のことを考えると、固有の文字は、その言語が死を迎えずにすむ（あるいは、少なくとも死期を遅らせる）ために大きな働きをするとも考えられる。だから、文字は、その言語の本質ではないかもしれないが、簡単に手離してよいかどうかは慎重に考える必要がある。明治以来のローマ字論者の運動が成功していないことや、一九七九年秋の第一四号から全面的にローマ字化したファッシュン雑誌『Zyappu』（「ジャップ」と読む）が、ほどなく発行されなくなったことなども、文字を取り替えることが難しいことをシサしているように思われる。試みとしては高く評価したいが、識字率の高い日本では、現実的でないともいえる。

（鈴木義里『つくられた日本語、言語という虚構』による）

注 加藤秀俊……日本の評論家・社会学者。

〔問一〕 傍線(1)(3)(7)(9)(11)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 空欄(2)に入る四字熟語

| | |
|---|---|
| ① | ② |
|---|---|

 浦々 の①と②に適切な漢字を入れなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問三〕 空欄(4)(5)(6)に入れるのもっとも適当な語句の組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| A | (4) | 日本語 | (5) | 国語 | (6) | 日本語 |
| B | (4) | 日本語 | (5) | 日本語 | (6) | 国語 |
| C | (4) | 国語 | (5) | 日本語 | (6) | 国語 |
| D | (4) | 国語 | (5) | 国語 | (6) | 日本語 |

〔問四〕 傍線(8)「日本語をもっと開いたものとする必要がある」とあるが、日本語を開く方向に向かう行動として適当なものを

左の中から二つ選び、符号で答えなさい。

- A 来日する外国人が日本人に対して不快感や隔たりを感じることはないように、外国人に寄り添いながら、やさしい言い回しや文法から成る日本語を話すように努める。
- B 日本に滞在している外国人たちが、日本の社会制度から取り残されることがないように、役所の書類をローマ字で表記し、記入の際も、ローマ字の使用を許容する。
- C ジャパネスクに関心のある外国人に来日するきっかけを作るために、「万葉集」の古き良き日本語を題材にした勉強会を開催し、日本の伝統文化を広める活動をする。
- D 若者たちが「バズる」とか「わかりみ」などと言っている場面に遭遇しても、彼らの発する語句の意味を文脈から推測して、その場を静観するだけにとどめる。
- E 留学する際、留学先のホストファミリーやクラスメートたちに日本語を教えてほしいと言われた時に備えて、小学校と中学校の国語の教科書を読みなおし、復習しておく。

〔問五〕 傍線(10)「言語と文字の結びつき」についての筆者の考えとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日本は徹底した国語教育を通じて、日本語固有の文字体系を国民の基礎的な教養とすることに成功したが、この文化事業の恩恵を日本国民と日本語学習者の両者が受けているのは、世界に誇れることである。
- B 今日まで日本語のローマ字化が成功していないのは、日本人が日本語固有の文字体系にアイデンティティを感じているからであり、これをローマ字で代替することは、日本語にとっては事実上の死を意味する。
- C 日本語固有の文字体系は外国人にとって、均質な日本語を習得する際の障害となるので、国語教育と日本語教育が没交渉に陥ることなく、こうした障壁を取り除けるように対話を続けてゆくべきである。
- D 日本語固有の文字体系について、外国人が日本語を学習する意欲を無くすので簡素化した方がよいといった声もあるが、日本語の文字は言語の根幹に関わるものなので、尚早な決断は避けなければならない。
- E 日本語固有の文字体系は日本語の本質ではない上、「開国」の提案があれば容易に放棄の対象にもなるのだから、メディアや人々の熱意によって達成された過去の偉業に執着している場合ではない。

〔問六〕 筆者の考える日本語の現状と展望についての主張としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 日本語の若いネイティブ・スピーカーたちが話す日本語は規範から外れていることが多いが、均質度の高い日本語を今後も保証する対策として、こうした間違いを国語教育の中でひとつひとつ矯正していかなければならない。

B 「わび・さび」や浮世絵のような日本文化に深い造詣がある知日派の外国人は、旧来の日本語にも関心があり、伝統的で、均質度の高い日本語を使い続けてくれるので、言語政策上、知日派は尊重していかなければならない。

C 日本にやってくる外国人労働者たちや海外で日本語を学習している外国人たちが不完全な日本語を使うことで、均質度の高い日本語を守ることができなくなってきたので、「国語」というこだわりは捨てなければならぬ。

D 明治以降追求してきた、均質度の高い日本語を、近年、外国人や若者たちが破壊しようとしているので、日本語の死を防ぐ、もしくは遠ざけるためには、彼らのこうしたおこないを改めるための措置を講じなければならない。

E 言語芸術である日本文学を執筆する作家たちは日本語のプロを自認し、最先端の日本語を生み出す原動力になるのだから、若者や外国人は作品を読んで、均質度の高い日本語に代わる、次世代の表現を吸収しなければならぬ。

〔問七〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 日本語を国内外で学ぶ外国人たちは彼ら自身が使いやすいように日本語を変化させているが、こんな自分勝手な営みであっても日本語に多様性をもたらす力になるので、みだりに彼らの日本語を非難してはならない。

イ 日本語ブームの到来と日の丸・君が代を法制化しようとする動きは通底しており、どちらも国家が求心力を失い、国民が規範を軽視しはじめたことに対する、一部の文化人や政治家の焦燥感の表れと見ることができる。

ウ 母国より高収入が期待できるという理由で来日する外国人の労働者たちが日本全国で経済活動ができるように、誰からも受け入れられる均質な日本語を学ばせることが、日本語教育の現場では求められている。

エ ジャパネスクに関心のある外国人たち、経済的な理由で来日する外国人労働者たち、日本国籍を持っていないながら日本語を母語としない人々、そして日本人の若者たちはもっと開かれた日本語を作り出すべきだ。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

超人思想には、不思議なところがある。超人が「力への意志」そのものを体現した新しい人間のモデルとして立てられていること、これはニーチェの思想全体からみて疑いようがない。ニーチェの代表作『ツァラトゥストラ』でも、「超人への愛」つまり「超人を目指し憧れて生きよ」ということがテーマになっている。けれども、⁽¹⁾そこでは肝心の超人の具体的なイメージはまったく示されていないのだ。

『ツァラトゥストラ』とは、山にこもっていた隠者ツァラトゥストラが、自分のなかに溢れ出るようにたまった知恵を人びとに分け与えようと山を降り、さまざまな場所でさまざまな人々に語る、というストーリーである。スタイルは明らかに新約聖書を意識していて、ニーチェが新しいバイブルを書こうとしていたことがわかる。有名な「神は死んだ」から始まり、「生はおのれを絶えず超克していくものだ」「人間は越えられていくべきものだ」と述べられ、「超人への愛」が説かれる。だが、超人がどんな存在であるかはまったく語られないのだ。

超人思想は評判がわるい。なぜなら、強者重視＝弱者排除とも見えるし、超人なんて理想を立てると、「俺は超人になんかなれないんだ」というルサンチマンを抱える人間も出てきそうである。たしかに、「貴族・戦士階級」のような野獣のような生命力を持つ人間を理想形にしてしまうと、たまったものではない。強くない人間は駄目な人間、ということになってしまうからだ。だが、ニーチェが『ツァラトゥストラ』のなかで「超人への愛」を語りつつも、超人の具体的な像を示さなかったのは、超人がなにかある「到達目標」のように受け取られることを恐れたからだ。そもそも、ニーチェがキリスト教的道徳をあんなに批判したのは、「ある正義や真理へと自分を適合させるような在り方」に嫌悪があったからだ。「生には到達すべき目標などない。いかに生を喜び、味わうか。そういうことしかないのだ」、これがニーチェの確信だった。とすれば、どうして「超人という理想」を再びニーチェはいわねばならなかったのだろうか。

それはまず、ニーチェがニヒリズムを意識していたからだ。理想がなくなってしまうと、どうしてよいかわからない。いきお

い、金や地位に走ったり、元気がなくなってしまうたりする。そういうことを見越してニーチェは〈超人〉という新しい理想を立てたのだ。〈強くてルサンチマンを抱えず、力の感情に満ち溢れている人間〉。こういう人間をめざすことによって、一人一人はルサンチマンに身を委ねたりせずに、各々がより充実しようとして新しい生の可能性へと挑戦していくようになる、というのがニーチェの思惑だった。

つまり、ニーチェにとって、この理想は生き方の枠や規範をつくるものではなかったのだ。むしろ、各々の人間が超人をめざすとは、一人一人が生への冒険をする、というイメージなのだ。「文化とは互いを高め合おうとする努力だ」とニーチェは考えていた。多くの人間が試行錯誤するなかで、新しい生の可能性を切り開く人間がたった一人でも出てくると、多くの人間が「ああ、こうやっても生きられるのだなあ」と思つて勇気づけられる。そうやって互いに励まし合い、高め合おうとすること。そういう努力が人間に生きる力を与えてくれること。ニーチェの考えていたのはそういうことである。

じつさい、『ツァラトゥストラ』のなかで、ツァラトゥストラはこういつている。〈自分のいうことを真理と受け取つたらおしまいだ。君たちが自分なりにどうすすんでいくか、それが大事なんだよ〉と。真理で身を守るのではなくて、一人の人間がそれぞれ自分の生を充実させようとしてさまざまに試行錯誤する、生とはそういう冒険であつてほしい。ニーチェが願つたのはそういうことだったのだ。

ニーチェの脳裏にあつたのはこんなイメージではなかったらうか。へいままで人間はキリスト教というゆりかごのなかで身を守り、ぬくぬくとしてきた。そのゆりかごはもう破れがちこちにあつて、不安を感じ出している者たちもいる。だが、ゆりかごがこわれてしまうのは、むしろいいことなんだ。解き放たれて、みんながいろいろな方向へ向けて散っていく。さまざまな試行錯誤、新しい生の実験を各々がやっていくんだ。

方向はちがっていても、各々がより充実しようとして努力する。そのことが互いを勇気づけるし、互いを高め合う。ニーチェがイメージする人間同士の関係の理想は、そういうものだった。これはまた、ニーチェにとって「文化」のあるべき姿でもあつた。

だからニーチェは「同情」ということをひどく嫌った。同情したってなんにもならない。自分の友が悩んでいるときには、同情することはかえって相手をばかにしていることになる。自分が元気に前進している姿をみせること、これがしてやれる唯一のことだ、と『ツアラトウストラ』のなかでニーチェはいうのである。

彼は社会からも学会からもすべり落ちながら、一人温泉町をまわっていたわけだが、彼のなかには「どうしてみんな神だの民主主義だの信じていられるんだろう。あいつらはそうやって自分をごまかしているんだ。神を必要としている自分とは何か、なんてことは絶対に考えもしない」という思いが去来していた。みんなが嘘つきで自己欺瞞している、という感覚が彼のなかにはつよくあった。

つまり、他人を愛せないし尊敬できない、ということが彼にとってはたいへんな危機だったのだ。ニーチェは自分の「生きる力」が萎えていくような感覚を味わっていた。「ルサンチマンを抱え込まず、つねに自分の生を肯定しようとつとめ、新しい生の可能性に挑戦する人間」、そういう人間を一目見たい。そうして自分も人間に対する希望をもちたい。彼は心底そう願っていたのだ。

互いに高め合いたい、互いに尊敬し合いたい。つまり、ニーチェは友人が欲しかったのだ。同情など欲しくない。互いに生を実験し合う仲間でありライバルであるような友人を。だから、ツアラトウストラにニーチェは、山を降りて人々に語ろうとするのだ。『ツアラトウストラ』は、ニーチェが人間に向かって放った最後のラブ・コールというふうには思えて仕方がない。〈他人を愛せるかどうか〉。これはだれにとつてもすごく大きなことだ。もともと(3)の強いひとが苦しかったり孤独のつらさをなめたりすると、つい「世間の人間は何もわからず幸福そうに生きている。おめでたいことだ。俺だけが人間の真実をわかっているのだ」というような気持ちになることがある。ニーチェにもその気は多分にある。けれども、そうやって自分を勝手に高いところにやっただけでどうしようもないのだ。

人を愛することができると、自分も幸せな気持ちになる。「ああ、なんて素敵な人だろう」って思えることは肯定する感情だ。でも、孤独がひどいと、人間にたいするそういう感受性を失ってしまうことがある。みんながばかに見えてくる。でも、そうし

たつて、幸せになれない。他人のなかに「生きようとする努力」を見出すことができるか。そういう感受性をもつことができるか。これが幸せのためには大事なことなのだ。

ニーチェは孤独だったから、人一倍「自己欺瞞」に敏感になっていた。キリスト教信者には「悪臭がする」と彼はいう。自分を正当化しようとするようなそぶりが見えると、その瞬間に嫌になってしまうのだ。ほとんど生理的レベルである。ニーチェの思想には、そういう嫌悪感が滲み出ている。だから物言いは過激になり、キリスト教に無への意志、という決めつけの言葉になつてしまひやすい。けれども、彼はやはり他人を愛したかった。〈超人〉思想には、ニーチェのこの想いが反映している。

(西研『実存からの冒険』による)

注 ルサンチマン……恨み。 ニヒリズム……一切が無意味で無価値であるという考え。

〔問二〕 傍線(1)「そこでは肝心の超人の具体的なイメージはまったく示されていない」とあるが、その理由としてもつとも適当なものの中ら選び、符号で答えなさい。

- A 具体的なイメージを示さないことで、人々に正しい生き方の枠や規範などを破壊させようとしたから。
- B 具体的なイメージを示さないことで、ルサンチマンに身を委ねてしまう人間を救済しようとしたから。
- C 具体的なイメージを示さないことで、生命力の満ち溢れた人間という理想を目指させようとしたから。
- D 具体的なイメージを示さないことで、あるべき規範というものはないことに気づかせようとしたから。
- E 具体的なイメージを示さないことで、世の中に理想がなくなったことに注意を向けさせようとしたから。

〔問二〕傍線(2)「ニーチェは「同情」ということをひどく嫌った」とあるが、ニーチェの考えとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 相手を慰めるのではなく、同じ問題で試行錯誤している自分の姿を見せることのできる友人が欲しかった。
- B 互いに高め合い、尊敬し合う関係を築き、それぞれの生を充実させることで本当の生き方に到達できる。
- C 同情することとは相手に共感しているふりをしながら、実際は相手をばかにしていることになる。
- D 友人が悩んでいるときには感情的なレベルで同情するのではなく、悩みの元となるものを解決すべきだ。
- E 立ち止まって慰めの言葉をかけるのではなく、自分が目指す方向へ邁進まいしんすることが相手にとって励みになる。

〔問三〕空欄(3)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 功名心
- B 猜疑さいぎ心
- C 自負心
- D 向上心
- E 独立心

〔問四〕次の文ア～ウのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符合で答えなさい。

ア 優れた人間を妬んだり恨んだりするのではなく、その姿に励まされ、刺激を受けて、自分自身の生を充実させるための新しい生の実験をしていくことが大切である。

イ 〈超人〉という目標を掲げることにより、ルサンチマンを抱くことなく、一人一人がより充実した生を得ることができ、また、ニヒリズムに落ち込むことを避けることができる。

ウ 『ツアラトウストラ』は、つねに自分の生を肯定しようとするため、新しい生の可能性を切り開く人間、つまり、互いに高め合い、尊敬し合える友人を欲したニーチェが放った最後のラブ・コールである。

三 次の文章は、藤原師実とそれに仕える藤原行綱にまつわる話である。これを読んで、後の問に答えなさい。(30点)

御心ばへなどのなつかしくおはしましけるにこそ。御鞆、御覽せさせ給ひけるに、盛長淡路の守といひしを、殊の外に褒めさせ給ひけるほどに、信濃の守行綱も、心には劣らず思ひて、うらやましく妬く思ひけるに、御足すませ給ひけるに、⁽²⁾「掴み奉るやうにたびたびしければ、「いかにかくは」と仰せられければ、「鞆も見知らぬ脛の」⁽³⁾と言ひつつ、洗ひ参らするを、一行綱もよし」とぞ仰せられける。御返事に、こそこそと撫で奉りける。もとの猿楽なれども、もの骨無き衆には、さもえ申さじかしとおぼえて。

また盛長のぬし、花ざかりに鞆もたせて、内裏へまかりけるに、行綱誘ひにやりたりければ、「御物忌に籠りて、人もなければ今日⁽⁴⁾はえ参らじ」と、返事しけるを聞きつけさせ給ひて、「ただ行け」とて、薄色の指貫のはりたる、香の染め布など、納殿より取り出ださせて、にはかに縫はせて、御鞆、花の枝につけて御厩の御馬にうつしおきて、出だし立てつかはしければ、「今日こそこのついでに、女に見えぬ」と思ひて、日ごろは逢はぬ女の家の棧敷に馬うち寄せて、語らふほどに、御馬、にはかに跳ね落として、前の堀にうち入れてけり。頭くだりのこる所なく、土かたに浴みたりけるを、女、家に入れて、洗ひあげて、いとほしさにこそ逢ひにけれ。御馬、走りて御厩に立ちにけり。あやしく聞こし召しけるほどに、居飼、おひつきて、かくと申しければ、いかにあさましく、をかしく思し召しけむ。さてしばしは、えさし出でもせざりけるとぞ聞こえ侍りし。

(『今鏡』による)

注 御心ばへ……師実の性格。 すまさせ給ひけるに……浄めさせなされたときに。 掴み……つねる。 猿楽……滑稽に演じること。また滑稽に演じる者。 もの骨無き衆……不器用な人々。 納殿……衣服などを納めておく場所。

居飼……馬を世話する者。

〔問一〕 傍線(1)(6)(7)の意味として、もつとも適当なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(1) 「なつかしく」

| | | | |
|-------|--------|--------|--------|
| D | C | B | A |
| かた苦しう | ほほ笑ましく | 馴れ馴れしく | 親しみやすく |

(6) 「いとほしさに」

| | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| D | C | B | A |
| 懐かしがって | 物欲しそうで | かわいそうで | 気まずそうで |

(7) 「あやしく」

| | | | |
|------|-----|------|------|
| D | C | B | A |
| 不思議に | 卑しく | 見苦しく | 不愉快に |

〔問二〕 傍線(2)「抓み奉るやうにたびたびしければ」とあるが、行綱がこの行動をとった理由は何か。もつとも適当なものを左

の中から選び、符号で答えなさい。

- A 師実への忠誠
- B 師実への懐古
- C 盛長への嫉妬
- D 盛長への憧れ
- E 自分への戒め

〔問三〕 傍線(3)「行綱もよし」とあるが、行綱の何がよいのか。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 蹴鞠
- B 奉公
- C 応答
- D 猿楽

〔問四〕 傍線(4)「ただ行け」とあるが、師実がどのように言ったのはどのような意図からか。もつとも適当なものを左の中から
選び、符号で答えなさい。

- A 行網を普段着のままで行かせたかった。
- B 行網を女の所に立ち寄せたくなかった。
- C 行網に本当の物忌を知ってもらいたかった。
- D 行網に内裏で蹴鞠を披露してもらいたかった。
- E 行網の行動にあきれて解雇してしまいたかった。

〔問五〕 傍線(5)「て」と文法的意味が同じものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A いと美しうて居たり (竹取物語)
- B かの事怠らず成じてむ (徒然草)
- C つどひて舟に乗りて送る (奥の細道)
- D 住む館より出でて船に乗る (土佐日記)
- E 竹の中におはするにて知りぬ (竹取物語)

〔問六〕 次のア～オのうち、本文の内容に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 師実は、奥手な行綱になんとかして結婚相手を探してやりたいと思っていた。
- イ 盛長は、つねに行綱をライバル視していたので、なにかと行綱を挑発してきた。
- ウ 居飼は、行綱と女との間に起きた出来事を、嘘を交えておもしろおかしく伝えた。
- エ 女は、細工して行綱を落馬させ、その後には介抱することで行綱の気を引こうとした。
- オ 行綱は、師実が蹴鞠のために用意してくれた衣服を着て、女に会いに行ってしまった。

